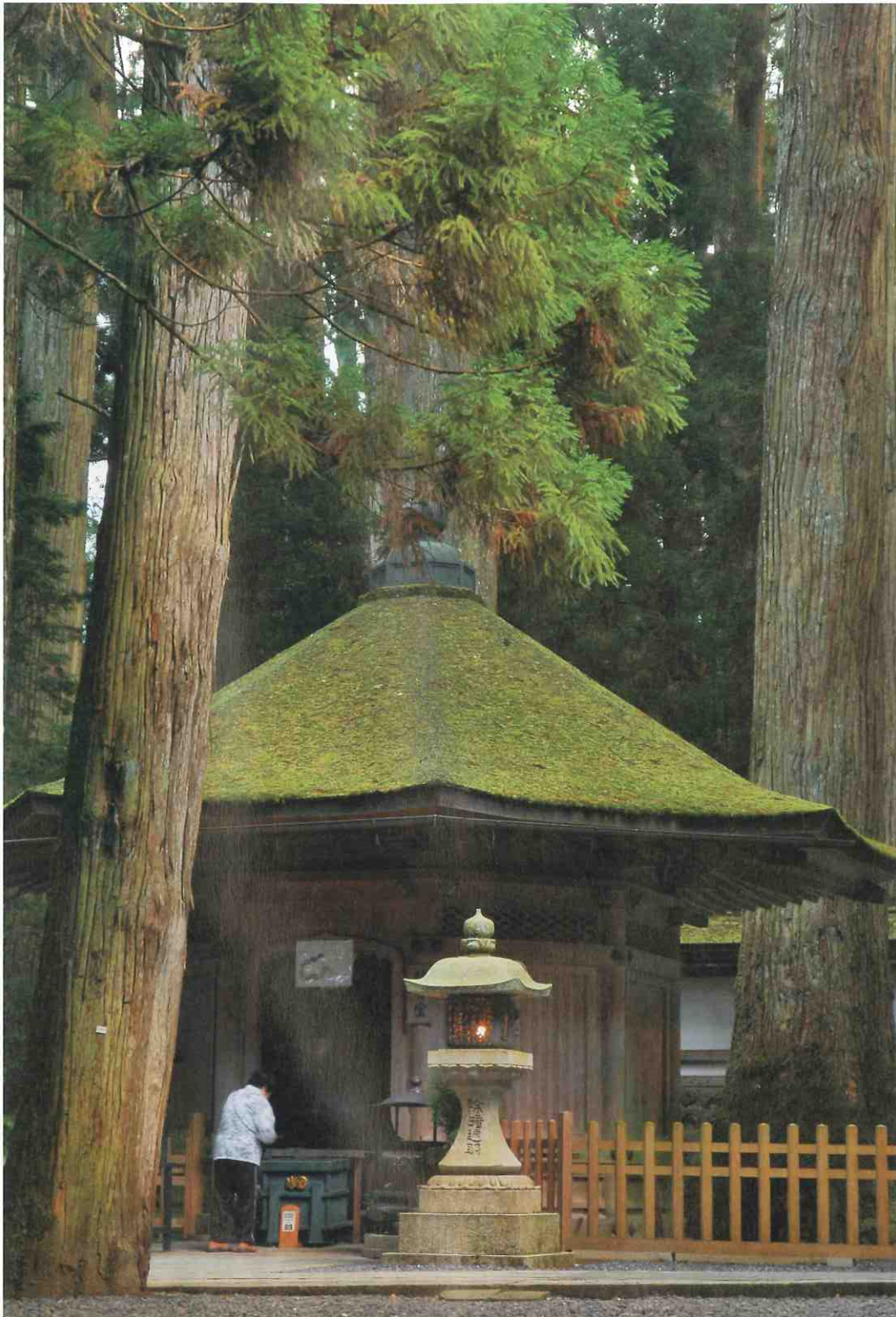


# 霊宝館だより



奥の院納骨堂

霊宝館だより 第85号

平成19年10月15日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山306

(財)高野山文化財保存会

高野山霊宝館

電話0736-5612029

<http://www.reihokan.or.jp>

## 企画展 「仏に祈りをこめた法具」

2007年9月15日（土）～12月9日（日）

同時 特別陳列（描かれた菩薩）開催中

企画展

「仏に祈りをこめた法具」

期間 9月15日(土)～12月9日(日)



紙胎花蝶蒔絵念珠箱 附念珠



弘法大師所持 金念珠 (11月3日(土)～7日(木)展示)



金銅四天王独鈷鈴



金銅三鈷杵



白銅平錫杖

「仏に祈りをこめた法具」展では、弘法大師住坊であった竜光院所蔵、弘法大師所持と伝承のある金念珠(期間限定)や、国宝・八大童子立像のうち矜羯羅童子、重要文化財・金銅五鈷杵、金銅三鈷杵などを含む、国宝一点、重要文化財一七点、和歌山県指定三点、未指定七点、合計二八点を展示公開致します。

わが国への密教の伝来は、一般には平安時代といわれています。真言を唱え、印契を結び、修法(儀式)を行って諸々の願いの成就をはかってきましたが、この修法を行うにあたり、古代インドの生活用具を起源とする特別な道具や壇など各種の装置を用います。これらを総称して「密教法具」といいます。また密教の修法は大壇や護摩壇といった壇を前にして行われることが多く、そのため密教法具を壇具だんぐと称することもあります。わが国には入唐八家をはじめとする留学僧によって多くの法具が請来され、後に国内でもつくられるようになりました。その他名だたる高僧の所持品として、修法の際の道具としてだけでなく、それ自体に対する信仰も生じているといえます。



収蔵品の紹介 59



矜羯羅童子像 像高94.5cm

国宝

矜羯羅童子像

八大童子立像のうち

木造彩色 像高94.5cm

鎌倉時代 金剛峯寺

八大童子は不動明王の使者・従者で、中国で撰述された「聖無動尊一字出生八大童子秘要法品」(以下「秘要法品」という経典にその姿や真言、供養法が説かれています。矜羯羅童子は制多迦童子と共に一般的には不動明王二童子像として造像されることが多く、そのため八大童子のうちでも特に知名度の高い童子です。

本像は「秘要法品」に説かれる像容にほぼ一致し、体は白く手は合掌してその間に独鈷杵を挟み持ちます。ただし蓮華の冠を戴くとされますが本像にはそれが見られません。

独鈷杵は金剛杵と呼ばれる密教法具の一種で、先の分かれ方により他に三鈷杵・五鈷杵などがあります。これら金剛杵はインドの武器が原型とされ、仏法の不滅と邪悪なものを打ち破る力を象徴しています。

腰を少しひねり、顔を左に向けるその姿は写実的で、童子の体つきがよく表されています。また巻き毛の髪、ふくよかな頬で親しみやすい表情はこの像が人気の高い理由の一つではないでしょうか。

八大童子立像は不動明王坐像(重文)と共にもとと不動堂(国宝)に安置されていました。不動堂はかつて一心院谷(五の室・金輪公園付近)にありましたが、明治四十一年(二九〇八)に現在の伽藍の地に移されました。

作者については古くから運慶作とされてきましたが、近年の調査でX線写真により胎内に運慶作品に共通する月輪形木札が確認されたことで、この伝承が裏付けられたといえます。

(F)

主な出陳品

国宝

矜羯羅童子(八大童子像のうち)

金剛峯寺

重要文化財

金製宝冠(灌頂道具類のうち)

竜光院

銀製宝冠(灌頂道具類のうち)

竜光院

金銅四天王独鈷鈴

金剛峯寺

金銅独鈷杵(一)

金剛峯寺

金銅三鈷杵(一)

金剛峯寺

金銅三鈷杵(二)

金剛峯寺

金銅五鈷杵

金剛峯寺

金銅五鈷鈴(一)

金剛峯寺

金銅五鈷鈴(二)

金剛峯寺

金銅独鈷杵(二)

金剛峯寺

蓮華形柄香炉

竜光院

高野大師行状図画 卷第三

地蔵院

高野大師行状図画 卷第六

地蔵院

厨子入俱利伽羅龍劍

竜光院

孔雀文磬

蓮花院

花鳥文磬

清浄心院

紙胎花蝶蒔絵念珠箱 附念珠

金剛峯寺

和歌山県指定

真言八祖のうち 龍猛菩薩像

西南院

真言八祖のうち 弘法大師像

西南院

白銅平錫杖

金剛峯寺

未指定

宝珠形舍利器

金剛峯寺

蓮台形舍利容器

金剛峯寺

鉄鉢

金剛峯寺

御請来目録

金剛峯寺

弘法大師所持金念珠(期間限定展示)

竜光院

金銅円形華鬘(一)

宝寿院

金銅円形華鬘(二)

宝寿院

## 連載

## 高野山の名鐘

## 其の7

## 金剛三昧院鐘

霊宝館副館長 井筒 信隆



## 高野山における

## 現存最古の古鐘

現在、金剛三昧院の山門にかか  
る梵鐘はこの釣り鐘の銘文から、  
高野山に室町時代頃まで現存して  
いたと思われる清浄金剛院の梵鐘  
として制作されたことが判明す  
る。江戸時代に編纂された『紀伊  
続風土記』には「山内第一の古鐘  
といふ承元と年号あり」と紹介記  
事があり、その姿は美しく最も優  
秀なものであると坪井良平氏は紹  
介されている。釣り鐘の池の間に  
は梵字によって滅罪真言、滅悪趣  
真言、尊勝破地獄真言などが陽鑄  
され表されている。また、四方の  
縦帯部分には不動明王、阿弥陀仏、  
観世音菩薩、勢至菩薩、地藏菩薩  
の名号があり、また、池の間の第  
一区には「高野山清浄金剛院 承



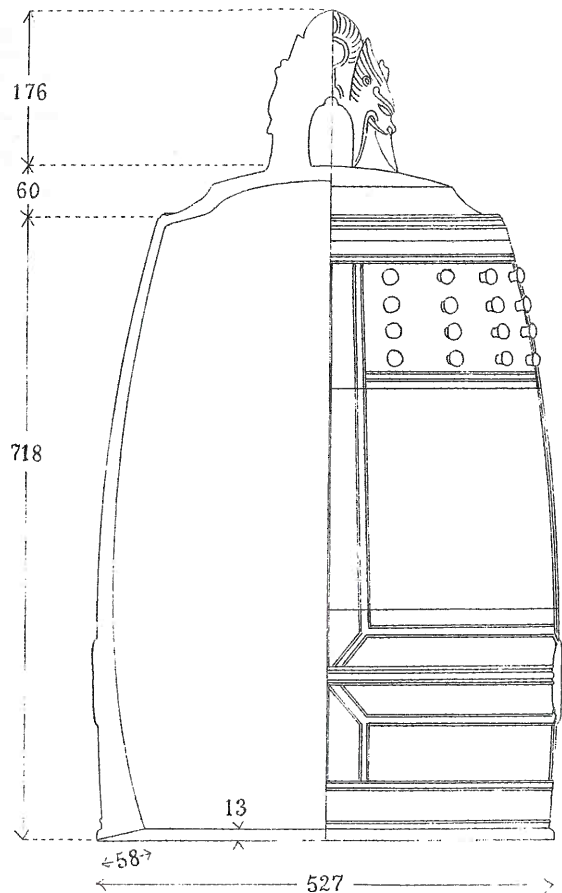
元四年（二二一〇）庚午十一月日  
鑄之 鑄師多治比則高」の所有寺  
院名と鑄造年ならびに鑄工名が存  
在している。

この鐘銘にある清浄金剛院は  
『紀伊続風土記』高野山之部卷之  
十九に収められる「廢院跡の条」



の記述によると、現金剛三昧院の境内にあったもので、鎌倉時代の終わり頃まで院は存続していたようである。また、「金剛三昧院文

書」の内に文安元年（一四四四）五月十日附の「清浄金剛院都司補任状」によると、既に清浄金剛院の敷地は荒野になっていたとする



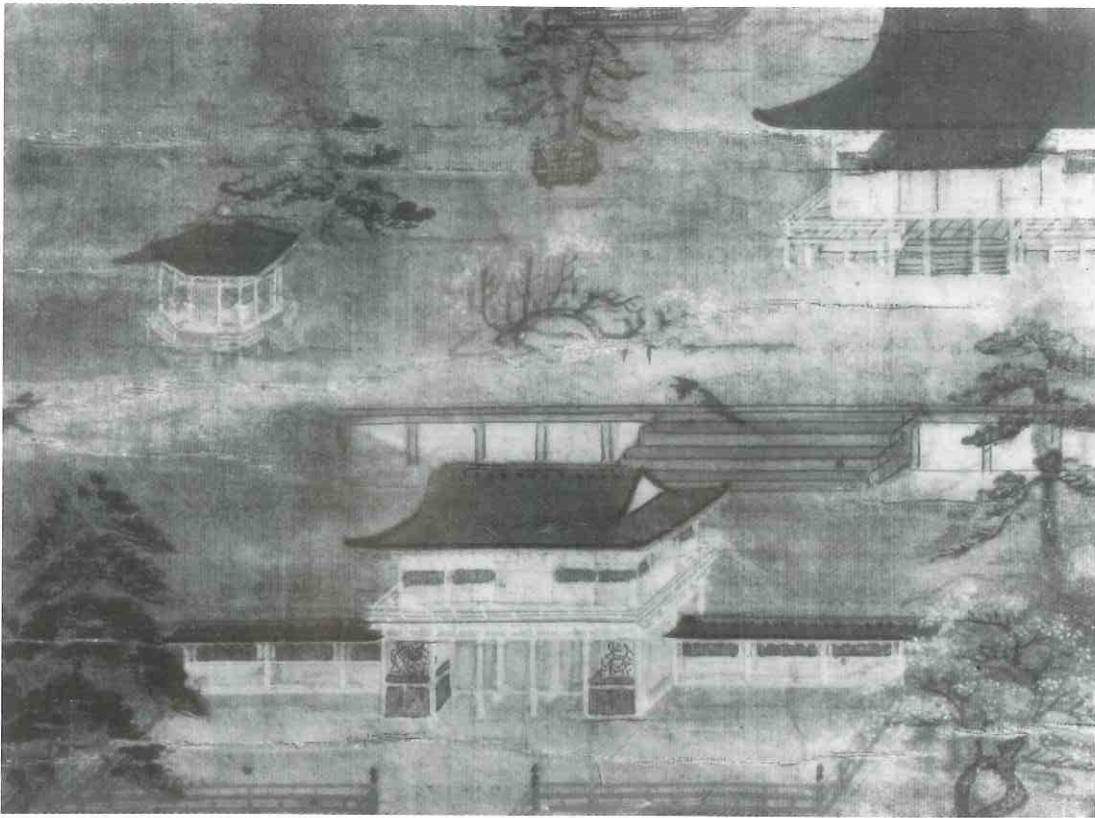
記録があることから、室町時代には廃絶していたことは確実で、その頃に梵鐘は金剛三昧院に引き継がれたものであろう、と坪井氏は論及している。

鑄工の多治比則高は河内国（大阪府）在住の鑄物師で、鎌倉時代の関西における鑄物師の代表ともいふべき一人である。多治（多治名も使用）氏の鑄物師として記録にみえる最初は和銅元年に「和銅開宝」を鑄造された時に、鑄銭司が国によって設けられたが、その

長官に丹治氏が任命された記事があり、その後、日本を代表する鑄物師としての家系が継承されたようであると教示されている。しかし、梵鐘などの鑄造作品に名を書き入れ伝わるものは平安時代末期の長寛二年（一一二九）在銘の神戸市徳照寺鐘以降のことであると指摘されている。本梵鐘は多治氏に属する鑄造師の在銘のものとしては四番目に古い貴重な古鐘と評価されている。

# 高野山壇上伽藍 中門跡埋蔵文化財を発掘調査

高野町教育委員会 池田 一城



中世期の伽藍絵図（弘法大師像）に記される中門です。  
建長5年（1253）5月、それまで三間一階建てだったものを五間二階建ての楼門に改めた記録があります。  
以後、この形式は、天保14年（1843）に焼失するまで継承されました。

高野町教育委員会では平成十八年より、中門再建事業に伴う中門跡地の埋蔵文化財発掘調査を実施しています。これまで第一次・第二次確認調査を実施し、中門跡地および中門について様々な知見を得ることができました。今回は霊宝館だよりの紙面をお借りして、これまでに得ることができた調査成果を簡単に説明させていただきます。

## 中門について

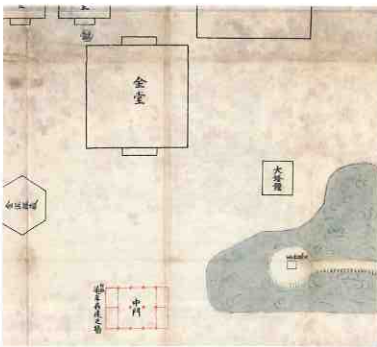
中門は九世紀初頭に創建され、その後は老朽化や火災による焼失を繰り返しながらも何度も再建されてきたという歴史をそなえています。このような中門の歴史的な変遷については、文献や絵画などの諸資料によって確認することができます。高野山霊宝館に所蔵されている膨大な絵図（絵画・美術工芸）資料のなかで、中門が描かれた絵図は少なくとも十点を超えますが、描かれた時代によって建築様式などは様々であり、上に挙げたような中門の歴史的変遷を知るうえで今回の発掘調査にとって

大きな情報源となりました。

このように創建以来何度も再建を繰り返してきた中門ですが、天保十四年（一八四三）の焼失以降は残念ながら再建されておらず、当時の面影を残す礎石だけが地上に露出している状態となっていました。

## 発掘調査の目的

今回の発掘調査における目的及び期待すべき成果は多々ありますが、  
①「現地表面に露出している礎石が本当に天保十四年に焼失した中門のものであるのかについて解明する」  
②「文献資料や絵画資料などにもとづく中門の歴史的変遷の事実確認を



文化7年の絵図。  
中門は文化6年（1809）に焼失していますので、その翌年に描かれた絵図となります。





天保9年（1838）絵図における中門



発掘調査現地説明会の様子（2007. 7. 28）

おこなう」のふたつが大きな目的と  
いうことができます。

### 発掘調査の成果

平成十九年度調査は六月十二日か  
ら八月七日までの約二カ月にわた  
り行われました。

まず、現地表面に露出している礎石を中心とした範囲で掘削を行い、地表面から約十五センチメートル下層において天保十四年の火災時のものと考えられる焼土面を検出しました。また中門の東西部分にそれぞれ、天保十四年の火災時に難を逃れて運

び出された二天像（東・持国天、西・多聞天 現大塔内）を安置するための根石がみつかり、二天像が安置されていたという事実が証明されたとともに、二天像安置位置と礎石を中心とした範囲でのみ焼土を確認したことから、現在の地表面に露出している礎石は天保十四年に焼失した中門のものであるということが実証されました。

また現地表面に露出している礎石の直下を深く掘り下げたところ、下から別の礎石が検出されました。この下層礎石も表面が燃焼により赤く変色しており、天保十四年に焼失し

た中門よりもひとつ古い時代の中門の礎石であることが確認されました。このような二重礎石の工法は大宰府政庁南門及び中門に確認することができますが、全国的にも非常に珍しいものです。

さらに一部の深堀箇所（約百九十センチメートル）において、中世以前に遡る可能性が高い遺構を検出しました。この遺構は大石による護岸基礎を築いた堅固な溝です。簡単に書いていますが、中世以前に遡るといふことは、高野山ならびに壇上伽藍の草創期にさえ手が届く遺構の可能性もあり、今後の調査に期待するとともに、慎重な調査を行う必要があると考えています。

以上、今回の中門跡発掘調査では非常にユニークでかつ重要な知見を得ることができました。とくに上下に重なった礎石や中世以前に遡る可能性のある遺構の発見は、伽藍地区だけでなく高野山の歴史を知るうえで非常に重要な知見であり、今後の調査における指標になると考えています。

第三次中門跡発掘調査は平成十九年十月半ばより開始予定です。お立ち寄りの際にはお気軽にお声をおかけください。

## 建築家 大江新太郎が 高野山に遺したものの

大江新太郎（一八七九〜一九三  
五）は大正時代から昭和の初めに  
かけて活躍した建築技師です。

大江技師の代表的な作品を紹介  
しますと、日光中善寺本堂（大正  
二年）、那須乃木神社（大正五年）、

東京明治神宮（大正九年）、和歌  
山日前国懸神宮（昭和元年）、東  
京神田神社（昭和九年）など我が  
国を代表する神社仏閣があり、ま  
た宝物館としては、日光山宝物館  
（大正四年）、明治神宮宝物殿（大  
正十年）、醍醐寺宝聚院（昭和十  
年）などが知られています。こ  
うした作品からは、神社仏閣やそ  
れに付随する宝物館を多く手がけ  
ていることがわかります。

大江技師の作品には、在来の建



大江新太郎  
大正10年5月撮影

築様式を守りつつ、それでいて当  
時の最先端といえる新工法を積極  
的に採り入れようとしたことに特  
徴があります。その集大成として  
もっともよく表れているのが神田  
神社の神殿でした。

神田神社の神殿は鉄骨、鉄筋コ  
ンクリート造りによって従来の権  
現造り様式を完成させており、当  
時としてはずいぶんと斬新な試み  
であったようです。大江技師のこ  
うした耐震耐火構造を基本とした  
設計思想は、宝物館などの設計に  
おいてすでに発揮されていたもの  
でした。

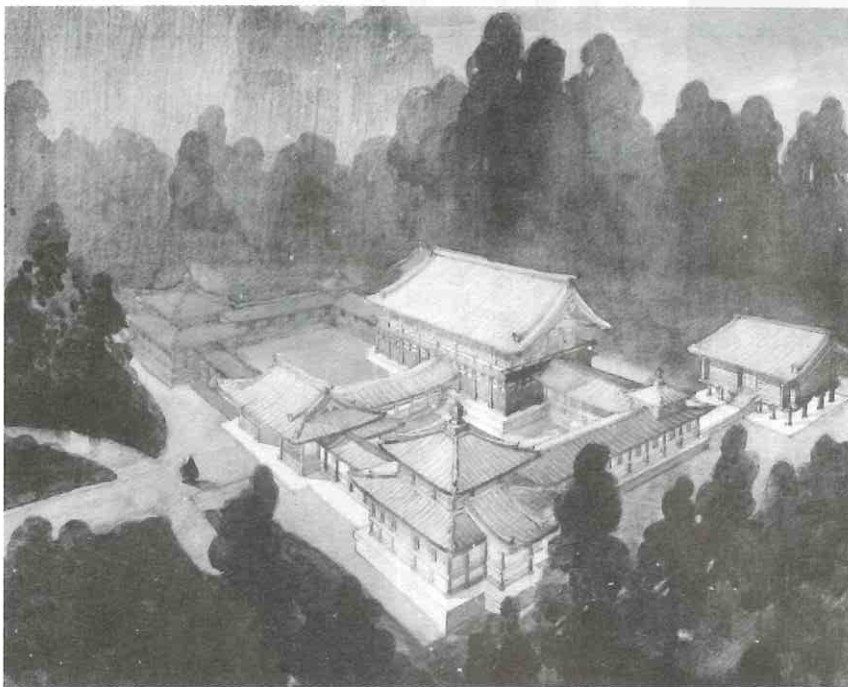
### 一、霊宝館の設計

大江技師が霊宝館の設計に携わ  
ることになったのは、明治時代か  
ら高野山の宝物調査に入っていた  
東京帝國大学史料編纂掛の黒板勝  
美博士や古社寺保存会の荻野仲三  
郎氏の推薦によりました。それは、  
大江技師が明治四十年（一九〇八）

から日光東照宮における中心的建  
物の大修繕工事主任技師を任せら  
れており、また大正四年（一九一五）  
には日光山宝物館を完成させるな  
ど、これらの仕事が高く評価され  
ていたからだと思います。

大正六年（一九一七）三月三日、  
大江技師は雪中高野山に登山しま  
す。東京在住の大江技師にとって

は、初めての高野山だったのかも  
知れません。当時は山上まで電車  
が通じていませんでしたので、高  
野口駅から九度山（稚出）までを  
徒歩か人力車で移動し、そこから  
さらに三里二十七町（約十五km）  
の山道を、徒歩あるいは山カゴに  
ゆられて登山する最短コースを利  
用したものだと思われます。



霊宝館完成予想図

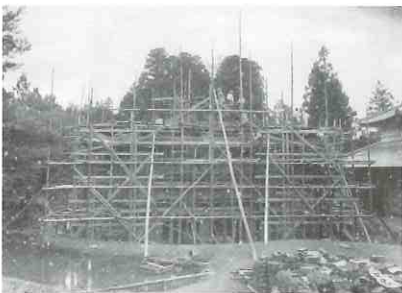
霊宝館は大正7年（1918）8月18日に地鎮祭を行い、大正9年9月30日に完成し、大正10年5月15日開館式を行いました。当初の計画では中央奥の紫雲殿を中心とした回廊式の展示施設であったことがわかります。向かって左半分の建物は未完成に終わり、現在、この場所には新収蔵庫が建設されています。





建設完成当時の霊宝館と庭園

大江技師は建築家であって造園学をも学び、東大建築科では造園学の講師を務めるほどでした。住宅建設の設計には同時に庭園設計までを行っていたということです。



建設中の小宝蔵

鉄筋コンクリートRC製の収蔵庫で、高床校倉造りとなっています。RCの収蔵庫としては我が国初期の建物となります。



小宝蔵

設計図には「霊宝館正門図案」  
「大正十四年四月」と記されており、大正十年（一九二一）の霊宝館開館後にもこうした設計作業を継続して行っていたことになりま  
す。これが追加依頼があつた設計だつたのかどうかはわかりませんが、大江技師が霊宝館でやり残

登山の翌日、大江技師はさっそくに山内をくまなく見て回り、宝物館の建設場所の設定と展示する仏像の検分とを行い、高野山の宝物館としてふさわしい設計が練られることになりました。

大江技師による霊宝館建設の当初計画では、鉄骨、鉄筋コンクリート造りが望ましいとされたようです。しかし、第一次世界大戦の好景気と戦後の恐慌によって鉄などの価格が跳ね上がり、さらに、当時の高野山では鉄材やセメント、砂利などの資材はすべて麓から索道（ロープウエイ）で運び上げなければなりませんだったので、鉄筋コンクリート造りだと必要以上

に費用もかさむこととなり、妥協案として木骨漆喰仕上げでの建設というところで決着します。

ところが最終的な変更箇所はそれだけにとどまらず、当初の設計計画では紫雲殿と名付けられた主殿を中心とした回廊式の展示施設であつたものが、さらなる物価高騰のあおりを受けて第一期工事として建物の半分のみを完成をめざすといった大幅な計画変更を余儀なくされました。

その後、ついに第二期工事は行われることなく、大江技師設計の霊宝館は未完成に終わり、後世、霊宝館といえは「片翼の鳳凰」といった名前で呼ばれることになりました。

鳳凰と呼ばれたのは、当初の計画が平等院鳳凰堂のように阿弥陀堂を中堂として両側に翼楼と楼閣を配置し、鳳凰が羽を拡げた姿をイメージさせていたからです。

我が国初期のRC建築  
大江技師による霊宝館設計は最終的には木造建築となりましたが、耐火を重視する収蔵庫では、さすがに鉄筋コンクリート、いわゆるRC造りで建設されることになりました。

この収蔵庫は高床校倉造り形式で二十四坪という比較的小さな収蔵庫でしたので、後に小宝蔵と名付けられました。

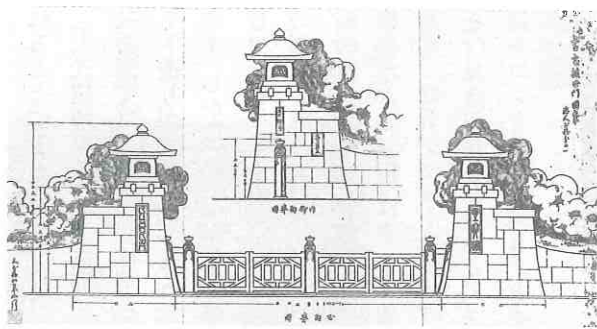
大江技師は霊宝館建設とほぼ同じ時期に、明治神宮宝物殿をRC造りで完成させています。明治神

宮宝物殿は大正九年（一九二〇）十月に竣工したことで、RC建築としては我が国の初期に位置する建物として知られていますが、霊宝館の小宝蔵も同じ頃に竣工していますので、初期のRC建築の一つということになります。もっとも、収蔵庫と限定すれば、我が国最初のRC建造物となる可能性もあります。

建設されなかつた正門  
霊宝館の建物は大江技師の全体設計計画からすると、建物の半分のみが完成したに過ぎませんでした。それでも大江技師自身の設計意欲は続いていたらしいことが、近年、小宝蔵の片隅から見いだした設計図からわかりました。

設計図には「霊宝館正門図案」  
「大正十四年四月」と記されており、大正十年（一九二一）の霊宝館開館後にもこうした設計作業を継続して行っていたことになりま  
す。これが追加依頼があつた設計だつたのかどうかはわかりませんが、大江技師が霊宝館でやり残

した仕事に対する強い意志が表れているように思えてなりません。図面に描かれる正門を見てみますと、大正期らしいモダンな雰囲気と、高野山の宝物館らしく門の両側には灯籠の火袋を備えた設計となっているのが特徴ですが、残念ながら建設されずに終わりました。



霊宝館正門図案 左下には「大正十四年四月」とあります。

二、奥の院納骨堂改築  
奥の院御廟ごびょうの西側には六角形をした納骨堂が建っています。大正時代以前に建っていた納骨堂は元

和八年（一六二二）に再建されて以来の建物であったらしく、柱などの部材は腐食が進み、その上、納骨堂としてはいくぶん狭くなっていたことで、大正十四年（一九二五）、全面解体修理が行われることになりました。この時、改築技師として選任されたのが大江技師でした。

すでに記したとおり、大江技師は明治期に行われた古社寺保存法にともなう日光東照宮の解体修理の主任技師を務めていました。その修理の方針は古色をつけて修理箇所を目立たなくするといった方法ではなく、建物の造営当初の姿に復元することを重視し、また新工法も用いて耐久性を持たせるといったものであったことが知られています。

納骨堂に関しても地下構造を兼ねた石垣にセメントを利用するな



奥の院納骨堂 大正時代  
改築以前の状況  
篠原行雄氏所蔵絵ハガキより複写



現在の納骨堂（昭和2年落慶）

ど耐久性を重視した処置を施しており、建物も単なる解体修理ではなく、建てられた当初の状態を考えて基本から設計し直したものであったようです。改築後の納骨堂は改築前に比べていくぶん高さが延ばされているようで、全体的にバランスの整った建物となりました。

施工にあたっては、地下基礎工事を東京の北與惣吉、建築技手として森口四郎、北與三吉、大工は辻本彦兵衛の各氏が担当したことが記録され、昭和二年（一九二七）五月二十二日落慶式が行われました。

三、山内景観の提唱  
明治維新による神仏分離令と上地あけ（知）令は、それまでの高野山の景観を大きく変える要因ともな

りました。

明治以前の高野山は寺領である土地や山林を独自で管理していましたが、上地令によって山林は国有林となり、寺院は一部の境内地けいだいを除いて官有地となってしまうした。

国民の戸籍制度は明治五年（一八七二）に開始されましたが、官有地となった寺院では住職といえども院内に戸籍を置くことができず、仕方なく境内の一部土地の払い下げを受けて民有の宅地とし、そこで戸籍登録を行ったといえます。以後、それまでにはなかった民有地というのが高野山内に存



高野山内  
山内の道路は、大正時代に五間幅の道路に拡幅されました。



在するようになりませぬ。

また一方において、経済的に立ち行かなくなった寺院跡地の払い下げが行われたことで一部が民有地として登録され、そこには規制なく住宅を建てたり商店を出す場合も少なくありませんでした。

こうした状況から、明治四十三年（一九一〇）六月、一定の規制を設けるべく山内土地整理事業というものが金剛峯寺によって始められました。これは山内の景観と森厳性をいかに保持させるかといったことが根底になっていました。が、続く大正時代になっても、景観に対する明確なビジョンを打ち出せませんでした。そんな時、境内整備事業計画の素案を明確に提唱したのが大江技師でした。

大江技師は山内を地理的に、神聖区域（伽藍・奥の院）、清厳区域（寺院）、清雅区域（住宅）、自由区域（商店）との四区域に分けることへの重要性を説きます。また境内の一部を公園とすることも認めており、大正九年（一九二〇）に金剛峯寺前（現、駐車場）の火除け地が公園として整備されたのは、こうした提唱によるものだった可能性がります。

大正七年、先の四区域分割案を

受けて山内の土地整理方針が決定し、この翌年、大江技師は土地整理事業の事務を委嘱することになります。そうしてさらに詳細な検討を加え、四区域に工業地、住宅地を追加して、「山内市区改正計画」とする図面と説明設計書が完成します。

続く大正十年十一月には、「山内土地整理計画委員会」が発足し、最終案として高野山内を奥の院区域、伽藍区域、寺院区域、商業区域、住宅区域、自由区域とに分けて整理する方針が定まり、大正十二年頃から境内整備事業が開始されました。

高野山の境内整備事業は河川の整備や道路の拡張も含まれていま



大正～昭和初期の高野山内とする写真（絵ハガキ）  
山内の道路は大正時代から昭和にかけて順次拡幅されていきます。写真は拡幅以前の状況を示しているものと思われませんが、場所の特定はできていません。



鶯谷地区は自由区域として料理店や劇場などが集中して建てられました。写真の建物は鶯谷にあった料亭うぐす楼です。地下に備蓄庫を備えた地上二階建ての豪華な造りで、大正末期頃に建てられました。昭和2年頃、庭先の稲荷社にまつわる行事での記念撮影です。日野氏提供。

したが、この時期に主となったものは民家や商家の移転でした。中でも大きな事業としては、明治期以降、現高野山大学の敷地（上の段）に軒を連ねていた料亭や料理店、豆腐屋、芝居小屋などの移転で、その対策として自由区域としての鶯谷地区が開かれ、料理店や劇場などが移転、新設されました。

ところがこれらの事業は、一旦、民有地となった土地を金剛峯寺が買い上げたうえで代替地を保証しなくてはならず、さらに移転費用までを支払わねばなりませんでしたが、現実には莫大な費用が必要となりました。当時の金剛峯寺執行長藤村密幡師の渾身の努力を持ってしてもすこぶる困難な事情が続出したとして（おそらく昭和元年の金堂焼失など）、結果的に境内整備事業を完遂するには至りませんでした。

大江技師は単に建築家として依頼された建造物を建てるだけではなく、神社仏閣の建物は神聖なる区域に建っていないければならず、周辺環境や景観を維持整備して機能することが寺院境内に望まれる重大要素だと考えていたようです。

今から約九十年ほど前に大江技師によって提唱された境内整備計画が、現在の高野山の景観に与えた影響はどれほどのものだったのか、今それを明らかにするのは簡単ではありません。しかし、当時の境内整備事業の方向性といったものが、現時点において、どのように評価されるべきものなのかをあらためて考えてみる必要があるのかも知れません。それは、仮に境内整備計画が完遂されていたとすれば、山内は今とは少し違った景観をみせていたに違いないからです。

(M)

霊宝館の庭園

# クルミ・くるみ・胡桃

元高野山高等学校校長 亀岡 弘昭



オニグルミの葉枝と果実

高野山や、その近辺に自生する何  
何グルミという和名をもつ落葉広葉  
樹はノグルミ、サワグルミ、オニグ  
ルミの三種。ノグルミ、サワグルミ  
は、それぞれ属を異にし、特に果実  
の形態や内容に大きな違いがあり、  
食用にもなりません。

一般にクルミと呼ばれているのは  
クルミ属のオニグルミのみ。オニグ  
ルミは鶯谷から光の滝をへて極楽橋  
に至る谷沿い、その右岸斜面の神谷  
という在所に下る町道沿いに多く、  
霊宝館の裏庭林に植えられているも  
のは幹周が一〇七センチメートル、  
あちこちの枝先に三〜七個の果実  
を。

我が国にはヒメグルミも自生して  
これらの果実の殻が縄文時代の遺跡  
から出土するそうです。

日本で植栽されているクルミには  
「満州（中国の東北部一帯）のクル  
ミの亜種」という意味の学名のつく  
先述のオニグルミ、ペルシア・コー  
カサス地方を原産地とし、ヨーロッパ  
でも栽培の盛んな、チャイコフス  
スキーやホフマンの「胡桃割人形」  
のペルシアグルミを基本種とする品  
種、ペルシアグルミの変種でシルク  
ロードを経て中国に入り、中国名を  
胡桃とし、中国から我が国にもたら  
されたテウチグルミ（カシグルミ）、  
テウチグルミとペルシアグルミの自



霊宝館敷地内のオニグルミ

然交雑種、その他、多くの品種があ  
るそうです。

これらの実から油絵具用の油も搾  
られたそうです。これらを広義の和  
名としてクルミくるみと呼び書くの  
は、呉（中国）の実、果実皮や樹皮  
を古くは比丘の衣染めにも用いたと  
いい、黒色の染料にされることによ  
る「黒実」の転訛という二説が。

中国名による胡桃は胡（中国の北  
方・西方の国外から）の桃（果実）  
ということによるといいます。

高野山では、くるみの実を精進料  
理に和え物・胡桃豆腐などとして用  
いられ、その実と糯米の粉・砂糖を  
主な原材料とした「くるみ餅」とい  
う銘菓もあります。

お釈迦さまの生誕の地とされてい  
るルンビニーやヒマラヤでも知られ  
ているネパールでは、ペルシアグル  
ミをOkharと呼び、駆虫、外傷  
の消毒、リュウマチなどの薬として  
使いました。

## 紫雲放光

霊宝館の秋の風情は格別です。庭園  
にはノムラカエデ、オオモミジ、エン  
コウカエデ、コハウチワカエデ、ヤマ  
モミジ、イロハモミジ、コミネカエデ  
等の品種がなんと百本以上植えられて  
おり、今月末から来月上旬にかけて一  
斉に色づきます。

霊宝館庭園のモミジは大伽藍蛇腹  
道、光の滝を通る林道不動谷川線（モ  
ミジ谷）と並んで高野山を代表するモ  
ミジ特りの名勝であり、シーズンにな  
ると光と自然がおりなす芸術を求める  
カメラマンの姿が一日中絶えることは  
ありません。

今年第二回モミジ祭りとして「秋  
の高野山」をテーマとした写真コンテ  
ストを計画中です。秋の風情が充満し  
た霊宝館で多くの皆様のご来館をお待  
ち申し上げております。

## 利用案内

### 開館時間

5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

11月1日～4月30日

8時30分～16時30分

休館日 年末年始のみ

拝観料 大人 600円

高・大学生 350円

小・中学生 250円

専用駐車場あり